

APO Letter

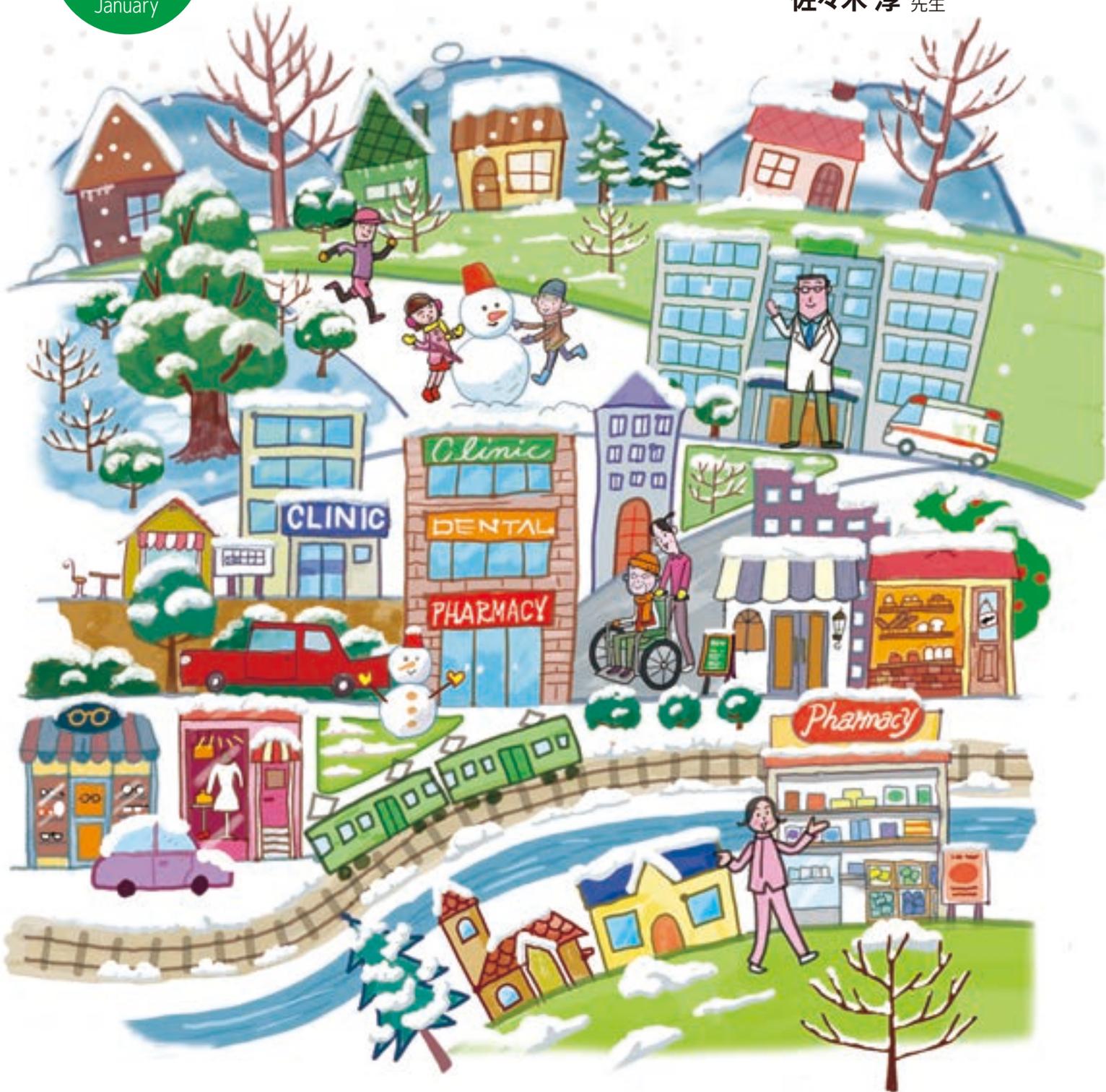
2022
Vol. 80
January

〈巻頭インタビュー〉

■ 多職種連携による在宅医療と薬剤師の役割

医療法人社団 悠翔会 理事長・診療部長

佐々木 淳 先生



C O N T E N T S

● Expert Interview	1
多職種連携による 在宅医療と薬剤師の役割	
総合メディカルグループが取り組む在宅医療	7
社内学術大会のオンライン開催 ファーマシーフォーラム 2021	9
かかりつけ患者さんとの信頼構築のために 日頃の感謝を込めて手紙をお送りしました	13

Expert Interview

多職種連携による
在宅医療と薬剤師の役割



医療法人社団 悠翔会 理事長・診療部長

佐々木 淳 先生

高齢化の進行や在宅看取り希望者の増加などを背景に、2006年の診療報酬改定で在宅療養支援診療所が新設、2012年には機能強化型在宅療養支援診療所・病院が新設されるなど、国は2025年の地域包括ケア構築に向けて、在宅医療の充実を図っています。また総合メディカルグループでも、在宅医療を通じた医療・介護連携を専門で行ない、社会貢献および地域の信頼に応える薬剤師の育成を目的として「在宅専任薬剤師育成プログラム」を開講するなど、在宅医療の充実に努めてきています。日本の在宅医療におけるトップランナーとして活躍する医療法人社団悠翔会理事長の佐々木淳先生に、多職種連携による在宅医療や薬剤師の役割、また新型コロナウイルス禍における在宅医療や今後の展望などについて、お話を伺いました。



【インタビュー】
高木和江
Kazue Takagi
みよの台薬局株式会社
在宅事業本部 本部長
1989年
昭和大学卒業



【インタビュー】
宇佐昌芳
Masayoshi Usa
みよの台薬局株式会社
代表取締役社長
1995年
長崎大学薬学部卒業
1997年
長崎大学大学院薬学研究科修了

悠翔会のビジョンと活動内容

宇佐 みよの台薬局では、先生が在宅医療を始められた頃からいろいろと教えていただき、これまで約15年間、一緒に走ってこることができたという実

感があります。改めて、先生が在宅医療に取り組むことになった経緯や、悠翔会のビジョンなどについて、お話しいただけますか。

佐々木 今から15年ほど前、大学院生の時には肝細胞がんのラジオ波治療を専門にしていたのですが、腫瘍は一旦はなくなっても再発して患者さんが亡くなってしまうという繰り返しに、これだけ良いのかと悩む日々を送っていました。そんな中、週に2日診療に出かけていた新宿の在宅クリニックで出会ったALSの患者さんが、本人は動

くことも言葉を発することもできないのですが、病気のおかげで夫と過ごす時間が増えてとても幸せですと仰っているのに接して、医者の仕事は病気を治し管理することだけではなく、むしろ患者さんによりよく生きてもらう手助けをすることこそが重要なのだと気づきました。「医療は人を治さなくても幸せにできる」。この可能性に気づ



診療中の佐々木先生
(写真：内海裕之)

ように学ばれたのでしょうか。
佐々木 開業したての頃は自分でなんでもやろうと思って、訪問看護師さんにも薬剤師さんにもケアマネさんにもあまり相談しないでいたのですが、ある日訪問看護師の方に、「先生のところは何でも自分たちでやろうとしますけど、それって患者さんにとって本当に良いのですか？」と言われて、改めて他の専門職の仕事をちゃんと見てこなかったことに気づきました。病棟でしたら患者さんを24時間見守っているの、何が起きているか分かりますが、在宅は週に一度や2週間に一度、

15分〜20分ほど訪問するだけなので、実際にはその方がよく分かっていることがありません。ですから看護師さんやケアマネさんが気づいたことを医師にフィードバックしてくれるという関係がないと成り立ちません。そのためには連携するという言葉の意味をきちんと理解すること、概念を理解するだけではなく、実際にコミュニケーションをとれることが大切です。
在宅医療においてコミュニケーションはとても重要な要素です。たとえ病気が十分に治らなくても、その病状をどう受け止めるかで不幸だと思うか幸

せだと思えるか、考え方が変わることもあるので、コミュニケーションそのものを援助の力にするということが在宅医にとつては重要なスキルです。そのうえで患者さんに対してだけではなく、チームのメンバーともコミュニケーションがとれていることが重要だと思っています。
高木 私たちもぜひそうなりたいですね。薬剤師も一人でやっている意識があまり、連携する相手のことを十分に分からないこともありますが、教えるとか指導するのではなく、聞いて学ぶと目線を合わせて、自分でできることを考えることがとても大切だと思います。昨年から総合メディカルグループ全体としても在宅医療に注力しているところがあります。今後、多職種連携の中で薬剤師に期待されることをお聞かせください。
佐々木 日本では高齢化の進行に伴い、医療のニーズが変化しています。比較的若い患者さんで頑張れば治すことができる病気であれば、薬剤師の役割としては服薬指導をきちんとしてアドヒアランスを保つことで良いと思うのですが、高齢者の場合は、この薬を飲ませた方が良いのかということまで、踏み込んで考えてもらえればと思います。例えば血糖コントロールが必要な患者さんに認知機能の低下が認められたとします。この患者さんに食後過血糖改善薬が処方された場合、当然食後にほかに飲む薬がある中で、果たして食前・

食後と1日6回も服用できるのかという疑問を感じてほしいと思います。病気だけではなく、患者さんの生活を見てほしいのです。病気が根治できない人に対する治療とは、病気とともにいかに生きていくかを一緒に試行錯誤していくプロセスだと思います。そこにガイドラインはありません。病気ごとに最適化された医療ではなく、患者さんの生活に最適化された医療を提供することが大切です。この薬を飲んだ方が良いのか飲まない方が良いのか、それは最終的には患者さんが納得して決めることです。患者さんが服用している薬を全部まとめてみているのは、かかりつけの薬剤師です。まずは、患者さんが選択した生き方に合わせて薬の量や組み合わせをコーディネートするところを踏み出してもらいたいと思います。
次に、患者さんにとっての最適な薬を考えると、薬剤師はその人の生活の中の優先順位をキャッチしないといけません。その人の生活のあらすじ、これまでどんな人生を生きてきて、何が楽しみでこれからどうやって生きていきたいのかといったことを少しずつキャッチしながら、その人にとっての最適な薬物治療を探っていくことが求められます。私は医療は対人援助職だと思っていますが、薬剤師には薬の専門家であると同時に、対人援助の意識も持っていたいただきたいと思っています。



き、その2か月後には大学院を中退して開業届を出し、同年2006年8月に在宅療養支援診療所を開設しました。
そのようにスタートしたので、悠翔会のビジョンを一言で表すと、患者さんや関わった人々を幸せにする、ということに尽きます。押し付けて医療を提供するのではなく、患者さんやご家族が選択した生き方にフィットした医療を一緒に考え、提供することで関わったすべての人を幸せにする、というのが私たちの基本理念です。また一歩進んで、悠翔会を「人を幸せにするための人間集団である」と定義すると、在宅医療はそのための手段のひとつなので、たとえ収益につながらないようなことでも必要であれば実践する、また、それが出来るだけの経済的・人的余裕をグループの中に担保して、働いているスタッフ全員が自分たちの支援が確実に患者さんの幸せに貢献できているということが体感できるように

な環境を作っていくことも重要だと考えます。
現在の活動内容としては、訪問診療を中心にして、訪問歯科診療、訪問口腔衛生指導、訪問栄養指導管理などを行なっています。訪問看護や訪問リハなどは地域に優れたステーションがたくさんあるので基本的には連携をすることとしています。地域との連携の仕方などについては、当時のみよの台薬局の社長にいろいろと教えていただきました。
高木 ありがとうございます。「人を幸せにする人間集団である」というコンセプトには本当に共感します。悠翔会では現在たくさんクリニックが開業されていますが、今お話しいただいた考え方は、それぞれのクリニックで院長が実行されているのでしょうか。
佐々木 悠翔会を立ち上げて5、6年は自分ですべてのクリニックを直轄するつもりでしたが、拠点が増えてくるに従って自分では気づかないことが増えてきて、逆にスタッフの方が創意工夫しながら診療、運営にあたっていることを知り、あまり出しゃばらない方がいいかもしれないと思いました。今後さらに拠点が増えていくことを考えると、佐々木イズムではなく、悠翔会として大切にしていく理念を共有できる、緩やかな連帯のような形式の方が望ましいかと思う、各院長に責任と裁量権を渡していくこととしました。
また、悠翔会では毎年患者満足度調査を実施していますが、夜間対応の患

者満足度を見ると、私が一人で夜間も診療していた時と、当直の医師たちが順番に診療している時とは、当直の方が満足度が高いという結果でした。最初は自分は赤ひげ先生になるつもりで頑張っていたのですが、チーム全体で赤ひげ先生を目指す方が良く

在宅医療における多職種連携と薬剤師の役割

高木 チームで対応する意味についてお話しいただきましたが、在宅医療をすすめるうえで、多職種連携において先生が心がけていることはどんなことでしょうか。

佐々木 最も重視するべきは個々の患者さんの生活ですから、患者さんの生活を継続することを最優先してチーム編成や役割分担をフレキシブルに変えていくことが必要になります。そのうえで、在宅医療のチームをサッカーに例えると、医師の役割としてはゴールキーパーだと思っています。それぞれポジションごとに専門性は違うものの、全員が目標を共有して同じ高さのフィールドを走り、シュートが打ち込まれた時にはゴールキーパーは責任をもってそれを止める。つまり、何か起こったときに受け止めて、最終のフィールドを守るといふゴールキーパーが医師の仕事で、多職種のメンバーが頑張ることで攻めることができるよ

とに気づきました。もちろん100点の完璧な人間はいないので、みんなそれぞれ強さと弱さがありますが、それがチームとして重なったときに、全体としては100点に近くなるということがチームで対応することの意味だと思います。

うに、医師が守りをしっかりと固めればいいのではないかと思います。

また、医師の無知で患者さんが不利益を被ることがあってはいけません。病院の場合は多くの医師がいるので一人が間違ったことをしても誰かが訂正してくれますが、在宅では謙虚に学び続けて分からないことがあればきちんと聞くという姿勢が大切です。自分たちは完璧な存在ではないので、弱いところは他の専門職に助けを求められないといけない、だから自分に弱いところがあるということをまずは理解する必要があります。そして自分の弱いところ、出来ないところに専門家を繋いで、いいチームを作っていくという心がけています。

高木 医師の役割として、チームをコーディネートすることが大事だということですね。その際に医師の声が強すぎても弱すぎてもいけないと思うのですが、そのバランスは先生ほどの



した。気づいたら昼食もとっていないとか。仕事はすごく生き生きとしてるものの、クリニックに帰ってくると空気が抜けたみたいになんか気分になんか、食欲もなくメールもチェックできない、自分のメンタルがコントロールできていない感じになって、そのうち自分がこんなに頑張っているのに他の人たちは何をやっているんだと、辛らつな言葉を吐くようになり、周りからも少しおかしいと言われました。こんな非常事態で適切な医療が受けられずに重症化していく患者さんを診ていると無常感がありメンタルも弱くなってしまいます。これは連続して診療にあたっているといけないと思ひ、現在はクリニックの医師もコロナ患者さ

新型コロナウイルス禍における在宅医療

ただし、これらのことがうまく機能するためには、医師と薬剤師の関係がもう少しフラットになる必要があると思ひます。医師の中には疑義照会を不服と感じる人もいますし、また多くの場合薬剤師のところまで検査データが届いていない、という問題もあります。医師も薬剤師も同じ専門職としてフラットな関係で、情報共有もできていれば、薬剤師の職能はもっと開花すると思ひます。

える薬剤師もいますが、まだそれほど多くはないと思ひます。私たちも認識を変えていく必要があると思ひます。ことですね。

佐々木 顔の見える関係にあるということが、とても大切ですね。顔の分からない医師には意見を言いがくても、顔を知っていれば医師の側も素直に聞く気持ちになると思ひます。医師対薬剤師という関係ではなく、高木さんと佐々木さんという関係で話の出来るネットワークを地域にたくさん作っていくことが大事だと思ひます。



移動中の佐々木先生
(写真：内海裕之)

高木 今回の新型コロナウイルス禍での在宅医療について、先生はメディアでもたくさんのご発言があります。特に印象的だったのは、これは災害医療だと仰っていたことですが、そのあたりを含めて、改めて先生のお考えをお聞かせください。

佐々木 実際の災害医療であれば、最初のトリアージが重要になります。今回の新型コロナウイルス治療においてもそれは同じです。まず重症度をきちんとトリアージする、その中で家で診ると決めた人たちが回復させる、入院を選んだ人たちが入院するまで命をつなぐという、この3つが新型コロナウイルス治療における在宅医療

の大きなミッションだと思ひます。私たちは8月から東京都と連携を始め、1か月に402人の患者さんを診たのですが、そのうち約半分が中等症Ⅱ以上でした。中等症Ⅱ以上の方で入院を選んだのは65%、残りの35%は在宅で最後まで診ましたが、この方たちは全員回復しました。入院が必要だった患者さんたちは数日以内に入院ができ、入院までの間に亡くなった方はいませんでした。

一方、今回は電話診療で診断・処方が可能となりましたが、果たしてそれだけで良いのかという疑問は残りしました。災害医療なので、苦しんでいる患者さんに一刻も早く薬を届けるという

意味では有効だと思ひますし、その面ではみよの台薬局さんにもずいぶんお世話になりました。ただ、実際に往診に行くと中等症Ⅱ以上の患者さんの採血を行うと、事前情報としては「持病無し」だったにもかかわらず、多くの方に耐糖能異常がありました。20代30代の場合、それほど病院にも行かないし、健康診断も頻繁には受けていないので、「持病無し」ではなく実は「持病不明」なんです。そういった人たちに電話診療だけでステロイドを処方しても良いのか、やはりきちんと医療を届けたいと思ひます。

んの往診を週のうち4日だけにする、少し疲れていそうな人がいたら精神科医や災害医療が専門の医師に相談するなどしています。災害医療は非常事態

で日頃の考え方が通用しないので、ストレスが溜まります。そのあたりは私自身が経験できたので良かったと思ひています。

今後の展望

高木 最後に悠翔会のこれからのビジョンやチャレンジしたいと考えておられることなどについてお聞かせください。

りません。ただ沖縄の南部などでは在宅医療の先生もそれほど多くはないので、私たちの存在も首都圏に比べると、とても大きいのです。これからは住民一人当たりのニーズがより大きい地域で仕事をしていくことが大事なのではないかと思ひます。

佐々木 悠翔会は、首都圏を、安心して年を取り、病気になっても最後まで暮らせる地域にする、それを在宅医療でサポートすることを目的としてこれまで活動してきました。もちろん首都圏においても今後も新しい拠点を作っていきますが、一方、全国に目を向けると、まだ東京や大阪ほど在宅医療が充実していない地域もたくさんあります。いろいろな地域に講演などで行ってみると状況は切実で、我々でやれることがあるのであれば、という気持ちで今年の5月に沖縄本島の南部にくるホームケアクリニック南風原を開設しました。初日だけで50人ぐらい患者さんをご紹介いただきました。すでに常勤医3人となり、フル稼働状態です。

今後は首都圏にこだわらず、住民一人当たりのニーズが高い、他に担い手がいないという二つの要件を満たした地域については、積極的に診療所を開設することを考えています。

首都圏は確かに患者さんが大勢いらっしゃるのですが、在宅医も大勢いるので地域単位で見るときには私たちの存在はそれほど大きくはあ

うございました。薬剤師として、病气だけではなく患者さんの生活全体を見ることが大事であること、薬の専門家であると同時に、対人援助の意識も持つ必要があることなど、改めて多くのことを学ばせていただきました。今後も、聞いて学んで考えたいと思ひています。

宇佐 みよの台薬局では、総合メディカルグループの一員として、これからますます在宅医療に注力してまいります。これまでの先生のご協力に改めて感謝申し上げます。これからも先生とともに地域の患者さんたちの幸せづくりに少しでも貢献できるよう、努めてまいります。本日は貴重なお時間をありがとうございました。

(本インタビューは2021年9月に実施されました)

(プロフィール)



佐々木 淳 先生
(ささき じゅん)

1973年、京都府京都市生まれ。1998年に筑波大学医学部卒業後、三井記念病院消化器内科、東京大学医学部付属病院消化器内科を経て、2006年に在宅療養支援診療所「MRC ビルクリニック」を開設。2008年、医療法人社団 悠翔会に改称、理事長に就任。2021年現在、18拠点のクリニックを構え、96名の医師・歯科医師、62名の看護師が常駐。総患者数は約6,600名にのぼる。その活動から、2017年アジア太平洋高齢者ケアイノベーションアワードBest improvement in Health Outcomes部門グランプリ、2017年フォーブス・ウェルネスアワード公共性部門グランプリ、2020年船井財団・グレートカンパニアアワード大賞など、受賞多数。

みよの台薬局株式会社は2016年12月より総合メディカルグループの一員になりました。高齢化の進行、地域包括ケアへの対応として、総合メディカルでは「在宅専任薬剤師育成プログラム」の開講など、グループを挙げて在宅医療に取り組んでいます。ここでは、志宝薬局 田園調布店をご紹介します。みよの台薬局株式会社は、高齢社会のニーズを先取りして早くから在宅医療に取り組んでおり、訪問薬剤管理指導のほか、無菌製剤の調製、麻薬持続点滴静注のためのシリンジポンプのレンタル、夜間の対応など、在宅医療における高い技術とノウハウをもつ、パイオニア的な存在の会社です。



志宝薬局 田園調布店のみなさん



志宝薬局 田園調布店
 東京都大田区田園調布2-48-15 田園舎ビル1階
 TEL:03-3721-7833 FAX:03-3721-8244
 (開局日) 月～土(祝日を除く)
 (開局時間) 月～金 9:00～19:30、土 9:00～13:30

在宅医療はとてもやりがいのある仕事。もっと仲間が増えて、多くの患者さんが在宅医療を受けることができるようになってほしい。



志宝薬局 田園調布店 薬剤師 佐藤育美 (2020年4月入社)

私が大学在学中、4年の時に父親が亡くなったのですが、亡くなる直前まで「最後は家に帰りたい」と言っていたにもかかわらず、父の希望を叶えることができず、とても悲しい思いをしました。その後、研修で訪れた病院でも多くの末期の患者さんが家に帰りたいと言っているのを目にしましたが、自宅で看取ということはハードルが高く、多くの人たちのサポートが必要となります。それであれば、自分がそのサポートをする側にまわろうと、父のこともあり決意し、終末期の在宅医療を担当したいとの想いで、みよの台薬局に入社しました。

入社してまだ2年目ですが、その中でも多くの貴重な経験をしました。私と同じ年頃の末期がんの女性患者さんを訪問した時に、その方のお母さまから、「娘が足に傷があるので何とかしたい」と相談され、クリニックに依頼して軟膏を処方してもらったことがありました。がんという重い病気の治療に直接関係しているわけではないですが、娘さんの傷を治してあげたいというお母さまの気持ちに応えることができ、とても喜ばれました。また中には脳性まひのため寝たきりで、呼びかけにも反応のない患者さんもいらっしゃいます。たとえ反応がなくても、「ちょっとお顔を見せてもらっても良いですか」と問いかけると、ご家族からはとても喜ばれます。

在宅、特に終末期の医療においては患者さんが服用している薬の管理だけではなく、患者さんの生活全体や患者さんを支えるご家族のことまで考えて、薬剤師としてできることを精一杯おこなっていくことが大切です。在宅医療は大変な面もありますが、とてもやりがいと喜びを得ることができる仕事です。もっと在宅医療に関わる仲間が増えて、多くの患者さんが在宅医療を受けることができるようになってほしいと思います。

志宝薬局 田園調布店 薬剤師の一日

1日のスケジュール

- 🕒 9:30 出社、朝礼
- 🕒 10:00～ 前日の在宅患者さんの情報引継ぎ、ケアマネさんへの連絡、等
- 🕒 13:00～ 訪問準備(調剤、鑑査等)
- 🕒 15:00～ 在宅訪問(個人宅の場合、10数軒)
- 🕒 帰局後、事後処理(クリニックへの連絡、翌日の調剤等)



在宅訪問にむかう佐藤薬剤師

「在宅専任薬剤師」育成へ社内プログラム開講

総合メディカルグループでは、在宅医療を通じた医療・介護連携を専門でおこない、社会貢献および地域の信頼に応える薬剤師の育成を目的として、「在宅専任薬剤師育成プログラム」を開講しました。今後200名の修了者を目標としており、プログラム優秀修了者には、老年薬学認定薬剤師の取得を優先的に支援します。当プログラムは総合メディカル株式会社と、みよの台薬局株式会社とのシナジーによって開発されたものです。

プログラムの概要

基本知識の習得

推奨書籍により介護保険・多職種連携・社会資源などの知識を習得します。

各職種による講演(Live)

リアルタイムで他職の講演を聞き、多職種連携への理解を深めます。

講義・グループワーク・演習(Live)

リアルタイムでの講義のほか、実践力向上のためのグループワークや事例検討・ロールプレイ演習を繰り返し実施します。

無菌調製の手技演習(集合研修)

テルモメディカルプラネックスを利用し、医薬品適正使用のためのトレーニングを実施します。

双方向コミュニケーション

教育プラットフォーム(UMU)を利用し、ディスカッション、投稿へのコメント、アンケート機能やいいね!機能を用いて、受講者同士で学びあいます。

メンター制度・仲間づくり

経験豊富な薬剤師からメンタリングを受けることができます。



みよの台薬局株式会社 第5ブロック ブロック長 志宝薬局 田園調布店 薬局長 佐藤 元啓

志宝薬局 田園調布店は東京の閑静な住宅街に位置し、近隣のクリニックを中心に月間約1500枚の処方せんを応需しています。そのうち約半数以上が在宅関連の処方せんとなります。当薬局には10名の薬剤師が在籍し、全員が在宅対応をおこなっています。在宅医療における薬剤師の役割として、薬を届けるだけではなく、患者さんの家の状態をみて服薬状況や健康状態を把握し、医師や看護師にフィードバックする、情報連携が重要です。私がこちらの薬局に赴任して10年以上が経過しましたが、医師からも連携先として当薬局をご紹介いただくなど、信頼関係を築くことができます。在宅医療に必要不可欠なコミュニケーション能力や相手のことを思いやる力などを若い世代へも伝え、多くの薬局で在宅医療、地域医療に貢献できるように、私たちの活動を広げていきます。



坂本社長による開会挨拶
(福岡会場)



東京会場、大阪会場にオンライン中継



三木田副社長による開会挨拶
(東京会場)

坂本社長のメッセージ(開会挨拶より抜粋)

ファーマシーフォーラムは、日頃から皆さんが患者さんの立場に立ち、医療機関や地域の多職種の方々と連携を深め、真摯に取り組んで来た成果発表の場であることは言うまでもありません。専門性を発揮し、より質の高いサービスを提供しながら進化し続けるため、今日この場で共有された知識や経験を、それぞれの地域でしっかり実践してください。その積み重ねが、「地域の笑顔を守り続ける」ことに繋がります。

総合メディカルグループは、「よい医療を支え、よりよい社会づくりに貢献する」ことを追求してきました。今、コロナ禍によって、多くの人が不安を感じています。患者さんや地域医療、地域社会など周囲を見渡し、一人ひとり気づきを行動に移してください。今こそ、地域に根ざした「みんなの健康ステーション」として、健康を願うすべての人々を支えてください。そして、総合メディカルグループ社員一丸となって社会にとってかけがえのない価値ある企業として、「未来の社会・医療を支えるヘルスケア業界のフロンティアカンパニー」を目指していきましょう。

特別講演 | 特別講演として、社会医療法人シマダ 嶋田病院内科部長の赤司朋之先生にご登壇いただきました



多職種が連携して行う地域包括的な糖尿病腎症重症化予防 ～ 薬剤師啓発活動の実践例とその効果～

社会医療法人シマダ 嶋田病院 内科部長(糖尿病専門医)
佐賀大学医学部臨床教授
赤司 朋之 先生

日本糖尿病学会専門医・指導医、日本糖尿病協会医療者教育委員、連携手帳編集委員、福岡県糖尿病協会常任理事、筑後糖尿病療養指導士会教育委員長、第4回日本糖尿病協会ウィリアム・カレン賞受賞(平成28年)

ご講演概要(レジュメより一部抜粋)

2007年9月から、嶋田病院では小郡・大刀洗地区で循環型糖尿病地域連携パスを開始、連携パス患者の治療に必要な内容を正確に診療所に伝え、検査や治療の意義を理解してもらうため、連携専任の糖尿病療養指導士(連携コーディネーター)を配置した。症例検討に保険薬局の薬剤師が参加したことを契機として、コーディネーターは薬局にも訪問するようになり、院外糖尿病教室などを開催、また合同勉強会を開催するとともに、「自己管理応援シール」の低血糖危険判断シールを糖尿病連携手帳に貼付する活動を、ネットワーク参加の薬局全体で行うことになった。

コーディネーターを介することで診療所や薬局との情報交換が円滑になり、対応に苦慮する症例の解決の糸口を話し合えるようになった。また、それぞれの診療所や薬局から、体重管理や検尿、眼科・歯科受診の重要性の説明と声かけが当たり前に行われるようになった。地域の薬局のネットワークを活用することにより、地域全体での糖尿病啓発が可能であり、各々の薬剤師が糖尿病の病態を理解し、積極的に啓発活動に参加することで、地区全体の診療水準の底上げ活動の一翼を担うことが可能である。

PHARMACY FORUM 2021

ファーマシーフォーラム 2021



2021年9月12日、ファーマシーフォーラムが2年ぶりに開催されました。1998年の開催から23回目を迎える今回は新型コロナウイルス感染予防対策のため、福岡、東京、大阪の3会場を結ぶオンラインでの開催となり、全国から1,123名が参加登録しました。また今回初の企画としてシンポジウムが開催され、「今後の地域包括ケアシステムにおける薬剤師の役割」をテーマに、地域医療に貢献する3名の薬剤師が講演をおこないました。

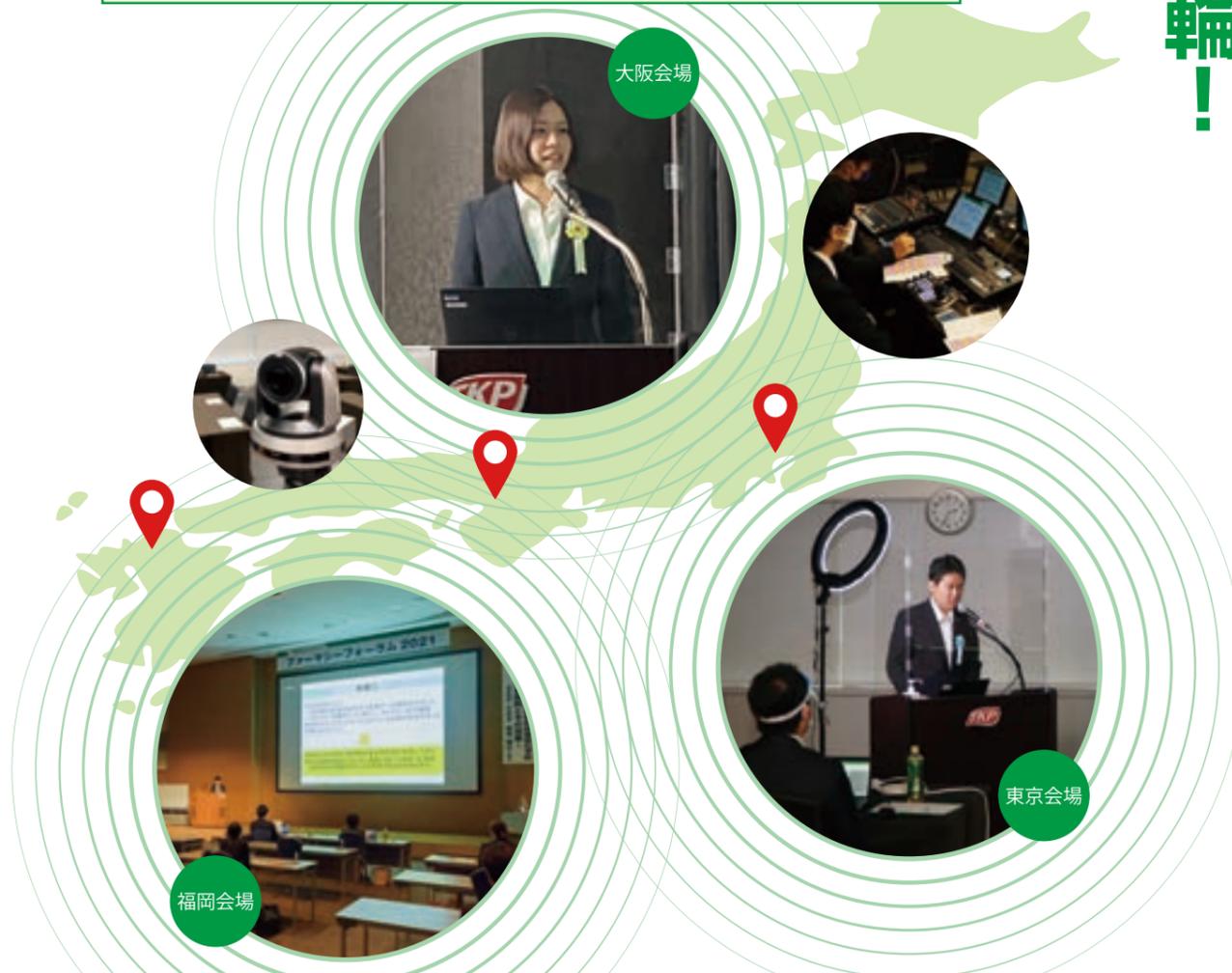
ファーマシーフォーラムとは

「薬剤師自らが研究し、発表する場」として、全国の薬剤師・RCS[®]など薬局関係者が集まる学術大会。本フォーラムは各店舗における優れた取り組みの発表を通じて全店舗で共有・研鑽を積み、質の高い薬局づくりに役立てることを目的としています。

ファーマシーフォーラム2021のプログラム

- 特別講演 ● シンポジウム(3演題) ● 口頭発表(薬学管理機能向上、14演題)
- 口頭発表(薬局機能向上、8演題) ● ポスター(16演題)

※RCS(ラウンドケアスタッフ)とは
保険請求業務のみならず待合室における患者サービス全般を主として担当するスタッフ



目指せ！健康づくりの金メダリスト！
みんなで広げる健康の輪！
地域の笑顔を守り続けるために！

PHARMACY FORUM 2021 最優秀賞・優秀賞紹介

口頭(薬学管理機能向上)

- 最優秀賞** 薬局におけるレニンアンジオテンシン系阻害薬、利尿剤、NSAIDsの3剤併用 (Triple Whammy) に関するNSAIDsの使用実態調査
大阪府 そうごう薬局 西冠店 福井 章人
- 優秀賞** エルデカルシトール服用患者に対する薬剤師の介入による高カルシウム血症の早期発見・早期対応
東京都 そうごう薬局 志村坂上店 保井 純人
- 優秀賞** PMS・PMDD患者に対する生活指導による効果の検証～生活習慣の問題点発見に向けて～
島根県 そうごう薬局 島根大学前店 山崎 美佳
- 特別賞** 調剤薬局による手洗い啓蒙活動の取り組み
広島県 そうごう薬局 近田店 藤岡 愛美



大阪会場



東京会場



福岡会場

口頭(薬局機能向上)

- 最優秀賞** 抗悪性腫瘍薬に対するツールを用いた服薬フォローアップ～副作用の早期発見・早期対応を目指して～
東京都 そうごう薬局 豊洲店 鈴木 理乃
- 優秀賞** 医薬連携におけるレンバチニブメシル酸塩服用期間中の電話フォローアップの課題と有効性の検証
福岡県 そうごう薬局 久米米医大前店 馬渡 つかさ
- 優秀賞** ピロリ菌除菌薬のフォローアップ!～呼吸検査偽陰性を減らす取り組み～
岡山県 そうごう薬局 新倉敷店 湊 菜月子

【ポスター部門】(社内専用サイトでの限定公開)

- 優秀賞** 併用注意薬の対応改善
愛知県 ナツメ薬局 桜山店 山野 真也
- 優秀賞** 医薬品リスク管理計画(RMP)を利用した副作用チェックシートの有効性検証
福岡県 そうごう薬局 干隈店 西野 皓子
- 特別賞** お薬手帳の普及活動～お薬手帳の現状と意義づけ～
福岡県 そうごう薬局 ひびきの店 阿比留 由香利



新型コロナウイルス対応のため、完全WEB開催に変更しての開催となりましたが、ファーマシーフォーラム2021も無事に終える事ができました。関わっていただいたすべての方々へ、この場を借りて御礼を申し上げます。ファーマシーフォーラムは、薬剤師・RCS(ラウンドケアスタッフ)のさらなる職能発揮の取り組み成果発表の場として1998年より開始されています。新型コロナウイルス感染拡大のため、2020年の大会は中止となりましたが、異例な状況下でも、継続して薬局の質を向上させる取り組みを行い、今回も多くの研究発表がありました。私たち実行委員は次回の開催に向けて、ファーマシーフォーラムにかける熱い想いを繋いでまいります。

ファーマシーフォーラム2021 実行委員長 そうごう薬局 小郡中央店 瀧下 達也



シンポジウム

「地域包括ケアシステムにおける、薬剤師の役割」

今回のファーマシーフォーラムで初の企画としてシンポジウムが開催されました。「今後の地域包括ケアシステムにおける薬剤師の役割」をテーマとして、地域医療に貢献し、活躍している社内の薬剤師がそれぞれの視点、経験から講演を実施しました。リモート開催ながら質疑応答も活発におこなわれ、熱気に満ちたシンポジウムとなりました。



講演① ALLそうごうで取り組む認知症すまいるカフェ～総合メディカルが目指す健康サポート薬局に向けて～
福岡県 そうごう薬局 石丸店 久保田 雅也



講演② 薬局薬剤師の専門性発揮について
福岡県 そうごう薬局 天神中央店 本田 雅志



講演③ 地域活動のTips ～未来は自分で変えられるか?!～
岡山県 そうごう薬局 新倉敷店 岡野 泰子

口頭演題 「薬学管理機能向上」部門 14演題 カテゴリー：医薬品適正使用、かかりつけ薬局、健康サポート薬局、在宅・医療連携

- 高齢者の安全な糖尿病治療のために～薬局におけるスクリーニングの有効性の検討～
- 妊娠・授乳期の薬物治療や聴取に対する女性来局者と薬剤師の認識調査
- 点眼薬の使用実態調査～点眼薬の適正使用を目指して～
- 腎機能から始まる地域連携～地域医療を担う薬局へのステップアップ～
- 吸入評価項目表による吸入薬指導と治療効果向上への取り組み
- 妊娠希望患者によるチラーゼンの用法の違いによる有用性の検討
- 地域の足の健康を目指した爪切り事業～フットケア指導士と連携したセルフケア推進～
- お薬手帳の新たな利用法の有用性検討～患者との新コミュニケーションツール「お薬情報交換用紙」～
- 胃薬長期服用患者への介入～出雲スケールによる客観的評価～
- 栄養ケアサポート薬局を目指して～低栄養患者への多角的アプローチ～

口頭演題 「薬局機能向上」部門 8演題 カテゴリー：服薬管理(服薬フォローアップ)、服薬管理(手技・手法)

- 動画を用いた乳幼児の服薬サポート～アドヒアランス向上を目指して～
- 服薬サポートにおけるアプリフォローアップ群と電話フォローアップ群の有用性の比較検討
- 質問票を活用した服薬後フォローアップの実施～効率的なフォローアップに向けて～
- 患者問合せ&服薬電話サポート～薬局の思うニーズと患者のニーズは一致しているのか～
- 糖尿病患者の服薬フォローアップにおけるスキームの有用性



第1回目の感謝のお手紙には、公衆衛生への貢献として新型コロナワクチンに関する情報をまとめた「健康応援レター」も同封いたしました。ワクチンに関するさまざまな情報が報道されていた時期でもあったため、接種に対して不安に思う方も多く、このレターを送ることにより不安解消へとつながったケースもあり、患者さんからも多くの感謝の声をいただきました。これからも今まで以上に患者さんに寄り添い、「あなたがいてくれてよかった、安心する」と言ってもらえる関係性をつくり、地域の医療、健康を支えていきます。



数多くの薬局の中から、総合メディカルグループの薬局を選んでいただいている患者さんに感謝の意を込めて、かかりつけ薬剤師からお手紙をお送りいたしました。総合メディカルグループではかかりつけ患者さんとの信頼関係を高め、地域住民に選ばれる薬剤師、薬局を確立することを目指しています。

かかりつけ患者さんとの信頼構築のために 日頃の感謝を込めて手紙をお送りしました

かかりつけ患者さんからの声

自分の文字で
しっかり書いてあって
嬉しかったです。
**嬉しくて
涙がでました。**

コロナワクチンの
相談をどこにしたら
いいだろうと
悩んでいたのが
嬉しかった

体調悪くて
気持的に
沈んでいたけど、
元気をもらえました。
ありがとう。

手紙をもらって
とてもうれしかった。
**ワクチン接種会場に
もって行って
お守り代わりになりました。**
これからも
よろしくをお願いします。

いつも
気にかけてもらって
嬉しい。
薬のことだけでなく
なんでもこうやって
気を遣ってもらえるのは
本当に助かる。

直筆で書いてくれて
とても嬉しかった。

気持ちが
**うれしいね。
心が元気に
なります。**

ワクチンの情報
ありがとうございます。
じっくり読ませて
いただきました。
**安心してワクチンが
打てました。**

かかりつけ薬剤師からも よろこびの声

かかりつけ
患者さんからの
**電話相談の
件数が増えた。**

「手紙ありがとうございました。
お薬もらいに来ましたよ。」と
耳鼻科移転後
受診していなかった方の
受診再開につながった。

多くの患者さんからの
“ありがとう!”に、
スタッフのモチベーション
アップにつながった

ワクチンを接種するか
迷っていたが、
手紙を見てワクチン接種を
することにしたらと言われ、
**患者さんの
不安解消につながった。**

**ご家族全員の
処方せんの対応を
お願いされた。**

いつもと違う医療機関を受診され、
門前薬局で調剤してもらったが、
**次からはやっぱり
この薬局でもらいたい!**
とお薬手帳を持参し
お薬があるか確認しに来てくれた。

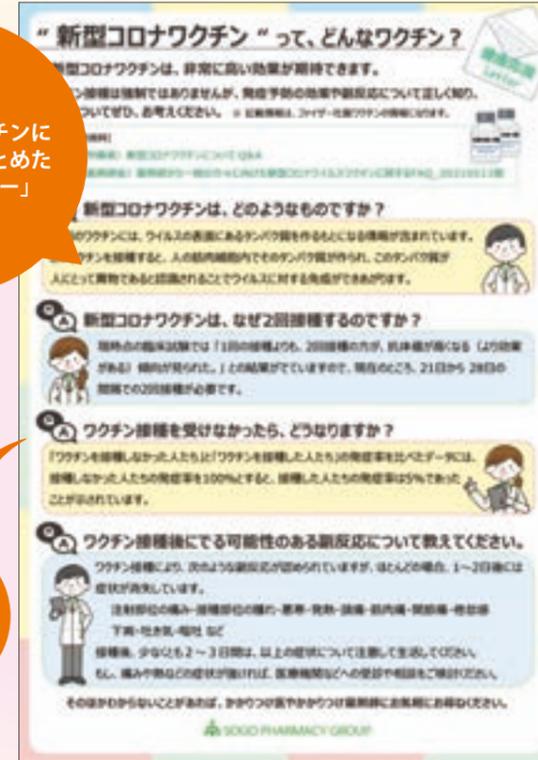
今までは聞いていなかった
病状について、
**詳しく相談があり適切な
アドバイスができた。**

**ご家族の処方せんを
持ってきてくださった!**

新型コロナワクチンに
関する情報をまとめた
「健康応援レター」



専用封筒(長形3)で
ポストへ投函



かかりつけ薬剤師から
それぞれの
患者さんに向けた
“手書き”メッセージ付き♪

手紙をお送りした
かかりつけ患者さん

かかりつけ薬剤師

17,236名

874名

かかりつけ薬剤師1人あたり、約20名の
かかりつけ患者さんへお送りしました。



vol.80

2022年1月発行 発行／総合メディカル株式会社
〒810-0001 福岡県福岡市中央区天神 2-14-8
薬局事業本部 TEL：092-713-7061

